

Title	青森県における学童集団疎開の受け入れについて： 私立学校の再疎開を中心に
Sub Title	The acceptance of private school evacuation in Aomori Prefecture
Author	柄越, 祥子(Sachiko, Tsukakoshi)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2020
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.36, (2019. ), p.311- 336
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20190000-0311">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20190000-0311</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 青森県における学童集団疎開の受け入れについて

——私立学校の再疎開を中心に——

柄越 祥子

### 一 はじめに

アジア太平洋戦争末期、東京都をはじめとする大都市の国民学校児童を対象とした学童集団疎開の実施過程は単純ではない。多くの研究者によって「場当たりの」「その場のぎ」などと評されているように<sup>(1)</sup>、悪化していく戦況に対応して、集団疎開の在り方も変化していった。疎開政策の変化の中で、特に東京都から千葉・茨城・静岡三県に疎開した児童、大阪市から和歌山県に疎開した児童たちにとって大きな転換点となったのが、昭和二〇年に行われた再疎開である<sup>(2)</sup>。当該県は、米軍上陸に備えて軍隊を配備する計画が持たれていたた

め、疎開児童を別の場所に移すことになった。「東京都教育史」は、「再疎開の理由の四分の三が防衛強化によるもので、次いで軍の要請、次に食料事情と続いていた」としている。<sup>(3)</sup>

先行研究では、再疎開について「空襲の危険に対処するためではなく、軍隊配備の必要性に基づく施策」<sup>(4)</sup>であることや、再疎開の受入れ地域は戦争末期のこの時点では様々な困難を抱えていたことが示されてきた。<sup>(5)</sup>このような政策的社会的背景を踏まえた上で、本稿では、そのような状況下に、実際の学童疎開の現場で疎開事業に携わる教員たちは、どのように集団疎開を運営していったのかを検討していきたい。具体的には、静岡県から青森県へと県外に再疎開した事例の中で、私立学校である慶應義塾幼稚舎を対象とする。一般に私立学校の集団疎開が「学校関係者の個人的な働きかけに依存せざるをえなかったために、今以て十全に捉えられないようにである」<sup>(6)</sup>と言われるように、慶應義塾幼稚舎も疎開の実施時期、疎開地域などについては公立国民学校に準じる形で集団疎開を実施しているが、一次疎開、二次疎開で静岡県に疎開した時には、疎開先宿舍との交渉や、保護者からなる後援会の経済的、物理的な援助などのような、集団疎開生活の諸条件は独自性の強いものとなっていた。再疎開は、先述のような、軍事的な目的や受入れ地側、東京側の双方の状況の変化の中で行われたものであるが、再疎開をするにあたって、私立学校の独自性は、どこまで認められ、どのように発揮されたのかを慶應義塾幼稚舎を事例に検討していく。<sup>(7)</sup>また、同じ渋谷区の青山学院緑岡初等学校を幼稚舎の比較事例とすることで幼稚舎の事例の意味を考えたい。

これまでの研究では再疎開について特化して語る時には、政策や受入れ地側の視点を中心であったが、疎開した私立学校の側から再疎開の実態を検証することで、戦時下の私立学校の一側面を明らかにしていくことが本稿の目的である。

## 二 私立学校の青森県再疎開

昭和十九年八月、渋谷区の学校は静岡県と富山県に最初の集団疎開、いわゆる一次疎開を行った。渋谷区にあった私立学校である慶應義塾幼稚舎（以下「幼稚舎」と表記する）は、他の公立国民学校と同様に区の指示に従って指定された静岡県へと疎開することとなった。しかし、二転三転する宿舍の選定や宿舍との細かな交渉、契約、更に物資の調達、運搬などについては、教員たちの努力に加え、保護者の組織、学校法人の理事、塾長などの力を借りており、更に彼らを通じた地元の有力者への働きかけも垣間見える<sup>(8)</sup>。同じく渋谷区にある私立学校の青山学院緑岡初等学校（現在の青山学院初等部の前身。以下「緑岡初等学校」と表記する）も疎開先の静岡県は区の指定通りであるが、宿舍については、渋谷区に指定された旅館が別にあつたが、希望する湯ヶ島の落合楼に寄宿するため、静岡県と直接交渉して渋谷区の決定を覆している<sup>(9)</sup>。このように、一次疎開の時には、それぞれの私立学校がより良いと考える環境を作り出すために、それぞれの学校が持ちうるルートで交渉を行っていた。

### (1) 應義塾幼稚舎の再疎開の実施

青森県が学童集団疎開の受入県として初めて登場するのは、昭和二〇年五月七日起案「千葉、茨城、静岡各県内学童団疎開地変更ノ件」で、疎開対象は渋谷区、荏原区の二区である。五月十五日の『東奥日報』には、「帝都の学童四千 今月末から本県に疎開」として、集団疎開実施の決定が報じられた。続いて、五月十七日

付の『東奥日報』には、「疎開学童協議会」として、以下の記事が載った。

東京都大森、荏原両区内国民学校の疎開児童二千名を受け入れる弘前市及び中、南、西、北津軽各郡の受入れ態勢協議会は十五日弘前市役所で開催、疎開側東京都教育局下村技師、関視学官他両区教学課員、受人側木村疎開課長、広本中地方事務所長、須藤弘前署副長、土岐弘前市学兵課長他各郡事務当局者等出席。

先づ疎開側の下村技師より疎開者の希望として食料の配給特に蔬菜の供給は十分である事、防空防火の点から宿舎は階下である事、宿舎が旅館であるときはその旅館の経営は受入地元直営である事：（中略）  
…更に疎開側では疎開学童の授業方針について成るべく地元の国民学校へ混入し、地元の学童の学級へ入れて貰ひたいと望み疎開学童の愛校精神涵養に努めて貰ひたいが、これが不可能の場合は宿舎を教室にしても良い、との意見を述べた。これに対し土岐学兵課長は、弘前市では二部授業として市内国民学校へ学童を收容する考へであると方針を明らかにした。（下線、引用者）

この記事によると、疎開する側である東京は、これまでの集団疎開の経験から、食糧や防空防火、経営のことなどを気にかけて相談していることがわかる。更に興味深いのは、疎開側のほうから、地元国民学校への混入や愛校精神の育成を求め、受入れ側のほうが、二部授業を主張した点である。文部省が出した昭和十九年八月二二日の「集団疎開学童ノ教育に関する件」では、地元の学校の教室の供与を得ることが望ましいこと、疎開学童と地元学童との友好に留意することなどの内容はあるが、混合授業を奨励しているわけではない。<sup>(10)</sup>青木哲

夫によれば、教育方式をめぐっては様々な文書がでていますが、総じて、受入れ側である「県は自己の主導権を主張し」、東京都側は独立学級方式をするような文書を出している。<sup>(11)</sup> 再疎開時に青森県で見られたこのような両者の主張は比較的、珍しい要求であったと思われる。

また、この記事の最後には、「各地の受入れ状況」として「弘前市一千名」など、受入れ人数が書かれている。幼稚舎が疎開した西津軽郡木造町は二五六名となっており、幼稚舎が五月十日付で渋谷区長に報告した人数は、「学童数二二六名、職員寮母作業員数四一名、合計二五七名」<sup>(12)</sup>であることから、この時点で、幼稚舎が木造に疎開するということが想定されていた可能性が高い。

実際に幼稚舎の教員たちが、どの時点で再疎開のことを知りえたのか、正確な記録はない。五月十日に教員が「疎開事務ニツキ」区役所に出かけたという記述、十二日には緑岡初等学校の中山国六主任が幼稚舎を訪問し、疎開のことについて話をしたという記述が教務日誌にあり、<sup>(13)</sup>この段階で既に情報を得ていた可能性もある。

五月十八日には、疎開学園副主任であり、実質的な責任者である吉田小五郎が疎開先の修善寺から東京に戻り、後援会委員の保護者ともに区役所に向かった。後援会委員は幼稚舎の集団疎開開始時から疎開運営の要となる活動を行っており、今回の区役所訪問は再疎開実施に向けて重要な情報が与えられた可能性が高い。翌十九日、二〇日と続けて、吉田が幼稚舎を訪れ、後援会委員や幼稚舎の教員と疎開に関することを打ち合わせている。そして二一日には、修善寺から二人の教員が上京し、吉田を含めた教員四人で渋谷区役所へ向かっている。幼稚舎には「国民学校長開催ノ件（校長会の意カ一引用者注）」<sup>(14)</sup>という二一日付の渋谷区からの印刷物が残っており、二三日に予定されている校長会には、「青森県へ再疎開児童ノ」の人数表を持参するように指示

がされているため、この校長会に関する印刷物を作成した二一日には、青森県への再疎開は周知の事実として扱われていたと考えられる。尚、この印刷物は二三日当日の「午後四時ニ受取りタルヲ以テ、ソノ由区役所ニ電話ノ上、二十四日出頭スルコト」とした<sup>(15)</sup>が、二四日は未明より山の手空襲があつたため、この校長会の内容がどのように幼稚舎に伝わつたのかは不明である。

渋谷区役所へ四人で向かつた翌日の二二日、吉田以下、修善寺疎開学園の教員三名は、青森へと出発し、二九日に帰京、翌三〇日に修善寺に戻つた。

幼稚舎疎開学園のある静岡県の修善寺では、五月二一日の午後七時より教員会議が開かれ、再疎開に関する報告がなされた<sup>(16)</sup>。報告者として吉田の名前があること、また、翌二二日の青森行き<sup>(17)</sup>の切符を「修善寺の駅長をおがみたおして」手に入れたとあることから、吉田たちは、二一日に渋谷区役所へ行つた後、一度修善寺に戻つた模様である。

二一日夜の会議では、まず、再疎開地が青森県西津軽郡木造町で、六月いっぱい<sup>(18)</sup>に完了の予定であること、また「附近ニ適当ナル所アリタル場合疎開地変更ハ、受入県側、先方ノ意向ニヨル」とし、場合によっては受入れ県や受入れ地域側の了承さえ得られれば、東京都や渋谷区の指示とは別に幼稚舎の都合で附近に疎開地の変更が可能であることを示唆しているように読み取れる。恐らく、この二点が渋谷区との話の中で出てきたことで、更に会議では、再疎開時の教員の身分保障の問題や、保護者へはまだ疎開先を明かさなまいという事など、慶應義塾や幼稚舎の方針が伝えられている。

当初、疎開地の変更の可能性を渋谷区から示唆されていた幼稚舎だったが、青森県へ事前調査に向かつた吉田達は、青森県疎開課長より「疎開地ハ青森県指定木造町以外ニ任意に選定シ得ナイコト」と釘をさされた。

そして、(18) 宿舍もこの時伝えられた木造中学寄宿舎、西教寺、慶応寺など、実際に宿舍とした場所と同じであり、幼稚舎は当初の青森県の計画の通りに再疎開を実施したことがわかる。

保護者への連絡は、東京(天現寺)の幼稚舎で六月七日に印刷物を完成させ、「デキルダケ配布スルコト」とした。(19) 「御通知」と題されたこの印刷物は、再疎開の理由について「危険と申すより、食料事情のためと察せられます」としており、再疎開先の説明でも「良質の津軽米、林檎の集散地を以て聞ゆ」「付近に工場全くなし。従って防空上きわめて安全にして、今日まで未だ敵機の姿を見たることなしといふ」と記載するなど、遠くの地への疎開に対して、保護者が必要以上に不安にならないように配慮をしている様子が窺える。

六月十三日の職員会議では、区役所より出発期日が六月二〇日から二五日と決まったこと、それに先立って、「先発隊」編成が報告された。(21) この先発隊は、教員四名、寮母三名からなり、六月十五日に東京を経由して青森へ向かった。(22)

十七日の午後四時半に木造町に到着した先発隊は翌日から交渉や挨拶をしてまわり、寄宿舎の掃除などをし迎える準備をしている。木造中学の寄宿舎は当時使用しておらず、(23) 他の宿舍とされた寺院も含め、集団疎開の宿舍として児童を迎えるために、先発隊の教員たちは苦労したようである。(24) このようなことも、伝統のある高級旅館を宿泊先とした修善寺疎開とは勝手が違っていた。幼稚舎には、この時の報告と考えられる用箋が二種類保存されており、十九日付で、木造は寒いこと、物資がないことなどを告げ、薪炭、食料、衣服、布団など、できるだけ持参するように促している。(25) また、翌二〇日の日付のある用箋には、すでに再疎開を終えた国民学校の人たちの経験などとともに、「輸送計画を変更しないこと」と訴えている。(26) これによると、六月前半に実施された再疎開では、駅員のアドバイスに基づいて輸送計画を変更し、食事などを準備して待っていた弘

前の人の「好意を無駄にして当局の怒りを買ったことがあった」と伝えている。受入れ側の好意と疎開側の気遣いがわかるエピソードともいえるが、移動計画に関しても、青森県に主導権があり、結果的に青森県の管理下での移動となっていることが窺える。

また、この報告では「何でもあるだけものを持ってきて頂きたい。物資は何にもありません」「電球は各方面に依頼して五〇〇でも一〇〇〇でも持参してください。交渉価値も絶大です」などと切々と訴えており、再疎開先の物資が不足しているように先発隊の教員が感じていることがわかるが、それは単純に現状、物が無いというだけでなく、今後も簡単には補充され得ない、修善寺への疎開の時にはあった「各方面への依頼」が、青森では難しく、自力で物資の調達をしなければならない緊張感が伝わってくる。

幼稚舎は六月三〇日、午後七時二分に三島を出発し、一〇時二〇分品川着。面会の後、一〇時三〇分に品川を発ち、七月二日午前一〇時四分に弘前到着の予定であった。<sup>(27)</sup>『東奥日報』(七月三日)によると予定通り二日に到着していることがわかる。

東京都からの第二次集団疎開学童として一日荏原区内五国民学校六百一名が黒石、大鰐両町とその付近へ、二日渋谷区内十校、一千二百四十八名が弘前市周辺、木造、板柳、金木両町へそれぞれ落ち着いたが、去月七、十二の二日には第一次疎開一千八百五十七名が入り、学童集団疎開はこれで一応打ち切られた。(傍線引用者)

先発隊の教員が事前に知らせているように、弘前駅では乗り換え時間を利用した歓迎会が行われ、児童の作

文には「弘前で汽車を乗換へた。弘前のてい車時間に駅前で青森の子供たちと、式を行った。<sup>(28)</sup>」また「弘前の国民学校で昼食を食べ、又汽車で木造へ走った。」<sup>(29)</sup>などの記述がある。

弘前から、更に移動し、木造に到着したのは午後三時半であった。「向陽国民学校の生徒六年生と高等科の生徒が僕たちを迎えてくださった。あいさつをして荷物を寄宿舎まで持ってきてくださった<sup>(30)</sup>」「……それからしばらくして木造駅に着いた。降りると木造の中学生が荷運びを手伝ってくれた<sup>(31)</sup>」「町の人たちは心厚く僕達を迎えてくださった<sup>(32)</sup>」などからわかるように、木造駅でも地元国民学校児童を中心に町の人の出迎えがあったことがわかる。

## (2) 青山学院緑岡初等学校の再疎開の実施

幼稚舎よりも先に再疎開を実施した緑岡初等学校が再疎開のことを皆に知らせたのは、疎開児童であった大島照雄の日記に「青森行きのお話を聞いた」とあることから、六月三日と考えられる<sup>(33)</sup>。

しかし、先述のように、五月二三日には再疎開に関する渋谷区校長会が開かれており、校長クラスの首脳部は遅くともこの頃には青森県への再疎開は耳にしていたと思われ、その間の緑岡初等学校の動向は明らかではないが、六月三日に児童へ再疎開を告げて以降、翌四日には在京の米山梅吉校長、中山国六主事が、再疎開準備のため静岡の疎開地を訪問し、挨拶回りや湯ヶ島国民学校で送別会、夕食後、青森に出発という性急な運びとなった<sup>(34)</sup>。

米山校長はこの湯ヶ島滞在中、五日付で、前青山学院長で、東奥義塾塾長も務めたことのある笹森順造に手紙を送り、再疎開への具体的な日程、再疎開人数などを伝えている<sup>(35)</sup>。この書簡には「緑岡初等学校再疎開二相

成申仕儀も御聞及候」とあり、この六月五日の段階で、青森再疎開については笹森の耳にもすでに入っ心配していること、更に笹森の兄で当時東奥義塾塾長であった浅田良逸への話もついていることがわかる。そのようなことから、米山校長以下学校関係者は、青森再疎開の情報を得て以降、関係方面との連絡、協力要請などに動いていたことが推測される。

十日の夜に湯ヶ島を發つた一行は、十二日の朝、弘前に到着し、弘前駅で現地国民学校の歓迎を受けている。<sup>(36)</sup>弘前にある和徳国民学校では六月七日、第一陣である渋谷区の国民学校（富谷、渋谷、本町、原宿、長谷戸、臨川、山谷、千駄ヶ谷各国民学校）と、荏原区の宮前国民学校の児童が到着したときに、他の弘前市内の国民学校と共に、「六年男一組、四年女三組が代表となつて停車場へ出かけ、市内児童を代表して本校六年庄司道夫が歓迎の言葉を述べ<sup>(37)</sup>」ており、緑岡初等学校を含む第二陣到着の六月十二日も「午前十時十四分着ノ疎開児童出迎二六年一組、六年三組弘前駅二赴<sup>(38)</sup>」いて、歓迎会が行われた。

到着した当日は、弘前市内の小堀旅館と石川旅館へ分宿し、六月二四日弘前女学校（現弘前学院）に移動している。この経緯については、疎開現地責任者の小宮山伍助は「県では寺町の寺院を提供することになつたのであるが、キリスト教主義学校児童が仏教の寺ではということを選んで<sup>(39)</sup>」と回想し、青山学院の集団疎開を研究した中村早苗は「青森県の指示では寺院の提供を受けることになつていたものを、弘前女学校に変更したのは、米山先生の依頼を受けて動いた笹森順三先生の配慮ではないだろうか。弘前に縁故疎開していた笹森の家族は宣教師が帰国して空いていた弘前女学校の宣教師館に滞在していたということからもそのように考えられる<sup>(40)</sup>」と述べている。このような青山学院と弘前女学院や弘前という地域との関係は、この時期だけのものではなく、青山学院の第二代院長である本多庸一が、弘前の出身であり、東奥義塾の再興や弘前公会

(のち弘前メソジスト教会)や弘前女学院の創立者であるなど、歴史的に深い関わりがあつての上での事と考  
えられる。<sup>(41)</sup>信仰の問題や笹森順造の影響力といった個別で特殊な事情があるにせよ、この移動は、児童たちよ  
りも先に準備のために弘前に入った中山主事が六月十一日の電報で「ジヨガクカウカシテクレ〔女学校が宿  
舎を貸してくれることになった〕の意か―引用者注、<sup>(42)</sup>」と知らせていることでもわかるように、緑岡初等学校  
側の働きかけで、青森県側の決定を自分たちの事情に合わせて覆した事例であることがわかる。

### 三 青森県での疎開生活

#### (1) 慶應義塾幼稚舎の木造での生活

幼稚舎の木造での生活は三つの宿舎に分かれて行われた。<sup>(43)</sup>中学校寄宿舎の五年、六年生は松の湯という町の  
銭湯で入浴している。<sup>(44)</sup>到着初日のことを教員たちは次のように回想している。

吉武 ついて風呂に入つてやれやれと思つたら、ワラジ視学というのが来ました。視学官がお通りになる  
のにおじぎをしないと怒っているんですよネ。何だかずい分ひどいことを云いましたよ。

吉田 その視学官はワラジをはいているんです。手ぬぐいでハチマキをしてね。<sup>(45)</sup>

『寮生生活誌』にも、七月二日の来訪者欄に「視学監」<sup>マ</sup>とあり、到着当日に視学官が来て、教員たちのいう

ように、東京から来た疎開者に対し、いくらか引き締めるような事を言い置いていった可能性がある。「ワラジ視学」とわざわざ吉武が呼んでいることから、この人物は、五月三日付で地方視学官に任じられた池田健三<sup>(46)</sup>ではないかと考えられる。池田は京都帝国大学文学部宗教学科、大学院で倫理学を修めたとされ、卒業後は青森中学に奉職したが「中学は月給が多くて、仕事が楽すぎる」として辞職、日雇い労働などを経て、下北郡の田代国民学校に赴任、僻地教育に尽力した。京都帝大時代に没頭したとされる西田天香の一燈園<sup>(47)</sup>の活動からもわかるように、その生活信条は行き過ぎなまでの清貧で、風変わりな言動から「ワラジ校長」の異名で知られていた。

池田は、視学官就任時に「私如きものかと思ひましたが熟慮の上お引受けする事にいたしました」として、「命に基き特攻精神に□き喜んで死ぬ気持ちで赴任する、よき死場所を得一生懸命頑張る積りであるから県下の諸先生方も私と一緒に死ぬ覚悟をもつて大いに頑張つて貰ひたい<sup>(48)</sup>」という思いを示しており、疎開で青森に來た教員にも同じような覚悟を求めていたのではないか。幼稚舎の教員が視学官に言われたこととして記憶している「生意気をいうのなら三度の飯を二度にしるとか<sup>(49)</sup>」という言葉も、池田が「一日に三度の飯を食はなければならぬとか：（中略）：米英流の既成医学にしたがへば、われわれはとうの昔に死んでゐるはずである<sup>(50)</sup>」という考えを元々持っていたことを考慮すると、池田にとっては幼稚舎の教員が受け取ったほどには暴言ではなかつた可能性もある。

このような多少の行き違いがあつた上に、この日、幼稚舎の教員たちが最も困惑したのは、池田が地元国民学校での混合授業を指示していったことであつた。「そこで、わたし（吉田―引用者注）と吉武さんと県庁に話し込みに行きました<sup>(51)</sup>」との回想があるように、木造に到着後の間もない混乱した日々の中で、新生活準備の

合間を縫って、七月五日と九日に吉田と教員の吉武が連れ立って青森に出張しているのはこのことと関係があると思われる。<sup>(52)</sup>

七月七日の教員会議ではこの件が大きく問題となり、「青森県ノ方針ハ全面的ニ地元学校ノ既設学級へ編入スルコトニアルガ、当方トシテハ出来ルダケソレヲ避ケルベク努力シツツアリ。シカシ恐ラク不可能トノ見ダミナリ」という悲観的な報告がされ、様々な意見が出たのち、「青森県ノ既定方針ヲクツガハスコトハ不可能ナルモ出来ルダケ特殊事情ヲ考慮シテ貰フヤウニ努力スルトイフコトニ」<sup>(53)</sup>なった。

次いで、九日、青森出張から戻った当日に開かれた教員会議では、「向陽国民学校へノ編入条件ニツキテ県庁トノ交渉結果ニツキテ報告」とし、「当方ノミノ学級ヲツクリ、二部授業トナスコトニ決定」したと伝えられた。<sup>(54)</sup>午前中は座学で、午後に登校ということであれば、修善寺のころとはほぼ同じと考えられる。そもそも、五月十七日付の『東奥日報』には、疎開側、つまり東京側が「成るべく地元の国民学校へ混入」を主張したのに対し、むしろ受入れ側の弘前が「二部授業として市内国民学校へ学童を収容する」と述べており、吉田達が覆せないと悲観した「青森県ノ既定方針」とは、どこで示されたものなのか不明である。この日の吉田の報告の最後に「視学官ガ混合編入ヲ主張シタノハ、座学ノミニヨルト町ノ児童トノ友誼的交渉ヲ阻害スルオソレガアルト見タノニヨルモノノ如シ」と加えられていることから、「覆すことのできない青森県の既定方針」として吉田達に示されたものは、視学官池田健三の考えであったかもしれない。当時の向陽国民学校児童の「向陽小は一学級六十人位であったので収容しきれなかったようです<sup>(55)</sup>」という回想もあり、実際には現地の人たちの目にも混合編入は現実的ではなかったようである。集団疎開中は、学校の授業らしいことはあまり行われていないとは公立、私立を問わず、どこの疎開経験でも多く聞かれることではあるが、それでも、授業を幼稚園の

児童に向けて、幼稚舎の教員の手で行うということは、私立学校として独自の教育方針を掲げてきた幼稚舎が、幼稚舎として集団疎開を行っている限り、教員や児童、更には通わせている保護者にとっても、とても重要なことであった。教員たちが、そこに拘り、主張をしたことは注目し値する。引率教員である渡辺徳三郎は、訪れた向陽国民学校で清掃中の児童に対して敬礼をするように叱咤している教員の姿を見て「『皇国民の練成』という旗印を掲げた、その頃の世の中で、どこもかしこも敬礼ばかりであったが、これには啞然とした<sup>(56)</sup>」と回想をしており、池田視学から感じられる違和感だけでなく、現地の国民学校との教育の在り方の違いも感じていたものと思われる。また、結果的には、青森県の方針を覆したというほどの衝突や変化ではないと思われるが、教員たちが、根回しをしたり、有力者の力を借りたりすることなく、直接的な交渉で解決したことも、修善寺疎開学園と異なった点であった。

修善寺に疎開したときは、一覽表を作るほど、頻繁に保護者が面会に来たが、木造再疎開後は、遠距離であること、戦局が悪化したことなどの影響で、修善寺のような形は難しいことが予想された。七月十日の「木造通信<sup>(57)</sup>」には「面会の規則は追ってお知らせしますが取敢えずお出の方はお帰りの切符が難しいので往復切符を求めて来られる様お勧め致します」とあり、青森に来ることが簡単ではないことがわかる。こうしたことから幼稚舎の木造での疎開では、修善寺の時のような組織的な物資の支援は簡単ではなく、一般の国民学校の疎開でもそうであったように、教員は食料の調達に追われることになる。木造がある津軽平野は有数の穀倉地帯だが野菜畠はあまり見られなかったという回想<sup>(58)</sup>にもあるように、到着後まもない八月九日の教員会議で、野菜の入手の見込みは一週間ほどないが、「土地の有力者」から、「個人的な買い出し」は控えるように助言されているとの報告があった。そして教員たちは、国民学校経由で野菜の入手ルートを確保できないか、というような

相談をしている。<sup>(59)</sup>

やがて幼稚園では、隣村にもネットワークを広げ、八月十日の教員会議では「川除村、長ノ世話ニヨル野菜購入ノ件ニツキ報告」がなされている。その発端は川除村村長夫人が「わたしの家で小学生が数人アカザの葉をつんでいたので何にするのかと聞くと食べるのだとのこと、気の毒に思い、家に作つてある野菜をわけてやりました<sup>(60)</sup>」という偶然的の善意からくるものであったが、「それからというものは村の婦人会に働きかけて野菜を集め、これを疎開学園の方に送つたりしていただいたのです。そのうちに「疎开学童を救わなければ」との声が高まり、慶応寺、西教寺（幼稚園が宿舍としていた寺院―引用者注）でも檀家の方々の協力を得て何とかお贈りしたのでした<sup>(61)</sup>」というように、協力の輪が広がっていったようである。こうしたルートは、慶應義塾の伝手をたどって作ったものではなく、疎開先で教職員たち、または疎開児童たちが直接受け入れ地の人々と触れ合うことで形成していったものといえるであろう。池田視学が示した形での学校での授業による「町ノ児童トノ友誼的交渉」は実現しなかったが、広場で遊ぶ幼稚園の児童に地元の子どもが話しかけるようなこともあり、「国民学校の生徒は僕達が学校へ行くのをまっつてゐて、又なるべく仲よくしようとしてゐると思つと、僕は早く学校へ行き土地の子供と遊ぶのを楽しみにしてゐる<sup>(62)</sup>」と、幼稚園の児童が作文に書いたように、学校外における触れ合いが存在していたことがわかる。

## (2) 緑岡初等学校の船沢村での生活

<sup>(63)</sup>緑岡初等学校は、青森到着後一か月もしない七月十六日、先の弘前女学院からさらに移動をすることとなる。<sup>(63)</sup>小宮山は「青森市が空襲を受けたので、第八師団所在地である弘前市も危険というので、県の指示によ

り急遽翌月中津軽郡船沢村に移った<sup>(64)</sup>と述べている。実際に児童の日記や手紙から、この時期に空襲警報が発令されたり、敵機が空を飛ぶのを見かけるようなことがあった様子が見て取れる。東京の空襲を経験して再開から参加した姉弟は、東京にいる父母に宛て、東京の心配をしながらも次のような内容を含む手紙を送っている。「弘前も近頃、東京と同じように毎日毎日正午頃、夜中頃、二、三度、一機または少数機でやってきます。(姉文字、七月十一日)」「こちらは十四日、十五日にはB29と小型の艦上機が来て奥羽地方をこうげきしました。:(中略) :だから、あの弘前市の町の女学校はあぶないので、岩木山の山のふもとの船沢村へ疎開をしまりました。だから、日本中どこがいいかわかりませんね。(弟政毅、七月二三日)」これらの手紙からは当時の緊迫した弘前の状況が伝わり、「弘前も危険なので別の場所に」という県からの指示は、引率教員含め特に疑問を持たなかったのではないか。

しかし、弘前市に集団疎開した千人を超える疎開児童たちが七月中旬に更に疎開先を移動した様子はない。七月三十一日には弘前市内の国民学校に「県から学童ならびに学校備品の疎開を支給実施するよう通達があった」が、この疎開は準備をしているうちに終戦となったため実現しなかった<sup>(65)</sup>。そして、終戦時にも東京からの集団疎開児童は弘前市内にいたことから、七月中旬に弘前市を出るような指令を受けたのは、緑岡初等学校特有のことであった可能性があり、そうであるとすれば、弘前が危険になった、という理由は幾分怪しくなる。

詳細を明確にすることは困難ではあるが、弘前学院の年史によると、緑岡初等学校の受け入れを決めたのと同じ理事会で、陸軍の部隊への教室の貸し出しを決定しており、<sup>(66)</sup> 部隊と疎開児童が同じ敷地にいることを良しとしない、といったような、軍事的な要請によって、弘前女学校からの退去を求められた可能性も考えられる。

いずれにせよ、県からの指示で弘前女学校を出た緑岡初等学校は、近隣の船沢村<sup>(67)</sup>へ移動し、「同村長の好意と地主達の理解により、地主の屋敷四軒の提供を受け分宿<sup>(68)</sup>」することとなった。この四軒のうち、中別所の高谷英城は、弘前中学で笹森順造の同級生であり、弘前女学校に所縁のある高谷とく子の甥にあたる人物である。<sup>(69)</sup>また、蒔苗の蒔苗丈は村長、宮館の津島忠郷家の庭は国指定の名勝など、いずれも大邸宅で、最北の高谷家から最も南の蒔苗家とは三キロほど離れており、宿泊先によってその後の生活は様々であったとされている。<sup>(70)</sup>疎開児童の手紙には近隣の船沢国民学校へは、「奉読式」などには訪問した記録があるが、圧倒的に農作業の記述が多く、教科の勉強に関することについては、宿泊している民家で行われたことしか書かれていない。<sup>(72)</sup>そのため幼稚舎のような二部授業などの形で定期的に地元の国民学校に通っていた可能性は低いと思われる。再疎開後の食糧事情については「多少よくなった」<sup>(73)</sup>「船沢村は米産地なので美味しい白米を十分食べることができたので一同大喜びだった」<sup>(74)</sup>などの回想も多く、また村の祭りに参加するなど地域との接触も見られた。これらのことは「分宿先が村長宅や地主であったことも要因であろう」<sup>(75)</sup>と分析されている。

緑岡初等学校の再疎開は、青森県が指定したとされる寺院（実際には最初は旅館に宿泊していたので、その判断もどのように下されたのか明らかではない）から、関係の深い弘前女学校への疎開、更に指定された船沢村での関係者宅への寄宿など、移転を重ねつつも、比較的疎開側の希望が通るような形で実施されている。そして、その背景には弘前教会、笹森順三、弘前女学院<sup>(76)</sup>、更に地元の地主などの協力が見て取れる。

#### 四 まとめ

慶應義塾幼稚舎の再疎開を青山学院緑岡初等学校と比較して見てみると、緑岡初等学校が青森県にある同じメソジストの弘前女学校関係者などの協力で再疎開事業を行っていたのに対し、幼稚舎では、そのようなことを十分に行うことができなかつたことがわかる。学外のネットワークでいえば、三田会のような組織もあり、慶應義塾当局、幼稚舎首脳部も意識はしているらしく、再疎開先に到着して間がない七月九日、東京の天現寺にある幼稚舎の教員が、三田の理事たちに疎開学園（再疎開の件と思われる）のことを報告すると同時に、「今泉塾員課長を通シテ、福島、山形、弘前ノ三田会ニ謝礼状ノ發送ヲ」<sup>(77)</sup>行っている。しかし、実際の疎開事業の中で、どのようなコネクションが働いたのかは見つけることができなかつた。むしろ、幼稚舎の教員たちが、修善寺で見たような塾当局や力のある保護者に頼ることなく、受入れの段階から実際に自分たちですべて動いていかななくてはならない姿が見られた。緑岡初等学校が、既存のネットワークを生かして、疎開を行ったのに比べて、青森県の人々との関係を教員たちが一から作っていたように見えた。

また、緑岡初等学校が、青森県到着後、繰り返し移転の中には、軍事的要請と思われるものもあったが、幼稚舎の疎開地は、軍事的用地ではなかつたため、幼稚舎疎開学園に青森滞在中の県内移転がなかつたことは幸運であつたといえるであろう。

青森県到着直後に幼稚舎が向き合うことになつたのは、受入れ地域の視学官が示した戦時体制に親和性のある教育理念であつた。視学官は教育方針に大きな影響力を持つことを考えると、木造に到着して間もない時期

に、幼稚園の教員たちに浴びせられた言葉は、青森県内の国民学校の教育がどのような方向性を持っているのかを、感じ取らせるに十分であったのであろう。疎開先の選定、移動方法など疎開経営そのものは、青森の方針を受け入れる立場を取り続けた幼稚園の教員たちが、混合編入の拒否に強く拘ったのは、幼稚園の教育を守るといふ思いからではなかったか。また緑岡初等学校が関係者の協力を得て守ろうとしたものも、引率の責任者でもある小宮山がくしくも述べたようにキリスト教主義教育であったといえる。<sup>(78)</sup> 疎開児童の後の回想では「疎開中、先生方はキリスト教に関することは口にだされませんでした」が、「実践的に聖書の理念を実現しようとしていたとされており、表だってキリスト教教育ができない時代であったからこそ、環境を重要視していたことがわかる。

戦争末期の教育崩壊といわれる時期に東京から遠く離れた青森県に再疎開した慶應義塾幼稚園の教員たちは、より自律的に自ら交渉し、疎開生活の維持の為に動いていたが、そうした教育活動の柱となっていたものは、私立学校が持つ教育理念を守ることでもあるのではないかと思われる。それは、緑岡小学校の教員たちがキリスト教教育を守ろうとしたことと通底する部分があるかもしれない。私立学校の教育理念と戦時下での具体的な教育活動の関係はより詳細な検討を必要とするため今後の課題としたい。

注

(1) 「その場のしぎ」という言葉を鍵にして、集団疎開が無計画無展望に立案・実施され、また疎開に関わる全ての営為が「学童の安全や平和には本質的には寄与しえなかった」と評価している。青木哲夫「集団学童疎開における再疎開の歴史的評価について——一条三子「学童集団疎開行政の史的考察」によせて——」『歴史評論』五一二号、平成

四年。

- (2) 再疎開は本稿で取り上げる県外への再疎開以外にも、県内で移動したのも多く、「むしろ県内移動の方が人数的に断然多い」とされる。一條三子「東京都学童集団疎開行政の史的考察」『歴史評論』五〇七号、平成四年、六〇頁。
- (3) 『東京都教育史』通史編四、東京都立教育研究所編、平成九年、一三七頁。
- (4) 逸見勝亮『学童集団疎開史 子どもたちの戦闘配置』大月書店、平成十年、二二六頁。
- (5) 一條三子『学童集団疎開——受入れ地域から考える』岩波書店、平成二九年、阿部恒也「いわてに再疎開したこと私たち」『学童疎開の記録』第1巻、全国疎開学童連絡協議会編、大空社、平成六年など。
- (6) 佐藤秀夫「総論 学童疎開」『学童疎開の記録』第1巻、一四頁。
- (7) 青山学院緑岡初等学校の集団疎開の実態については、中村早苗「青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開——大島照雄日記をてがかりに——」『教育研究』第五八号、平成二六年と、これを小学校高学年向きに書き直したものに史料などを加えた『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』編集委員会編、平成二七年、に多くの部分を依拠した。
- (8) 『稿本 慶應義塾幼稚舎史』慶應義塾幼稚舎編、昭和四〇年、六七四〜六七五頁。なお、保護者の尽力や理事、塾長のかかわりについては、拙稿「慶應義塾幼稚舎における学童集団疎開に関する一考察——幼稚舎緊急対策後援会との関係から——」『近代日本研究』第二三号、平成十九年。
- (9) 前掲、中村、三五頁。
- (10) 前掲『東京都教育史』通史編四、一三一頁。
- (11) 青木哲夫「東京都集団学童疎開にみる戦時下の都政」東京歴史科学研究会第三〇回大会報告『人民の歴史学』第一二九号、平成八年、九〜十頁。
- (12) 「再疎開集団疎開人数報告書 昭和二十年五月十日」。慶應義塾幼稚舎長清岡暎一名で、渋谷区長磯村英一宛に書か

- れたもので、定期的に提出したものの下書きと考えられる。「当校修善寺町集団疎開ニ於ケル人員左ノ通り」とあり、青森県への再疎開を意識したものではないと思われる。(「疎開報告文書綴」慶應義塾幼稚舎所蔵)
- (13) 「幼稚舎教務日誌(天現寺)」五月十日、及び五月十二日(慶應義塾幼稚舎に保管されている、在京の教員宮下正美による教務日誌。昭和十九年十月二日から昭和二〇年八月十五日まで記載されている。本稿では便宜上「天現寺日記」とする。) 続く、天現寺の幼稚舎を中心とした教員の動きはすべて「天現寺日記」による。
- (14) 慶應義塾幼稚舎所蔵。「号外」とされた磯村渋谷区長名による印刷物。宛名は「各国民学校長殿」となっており、題名が「国民学校長開催ノ件」とあるが、「校長会開催」の意味か。会議の内容は「一、学童集団疎開ニ関スル件一、残留児童教育ニ関スル件 一、教員定期増俸該当者調査ノ件 一、其ノ他」とある。
- (15) 前掲「天現寺日記」五月二三日。
- (16) 「疎開学園教員会議記録」慶應義塾幼稚舎所蔵(本稿では「教員会議録」とする)。
- (17) 吉田小五郎「幼稚舎の歴史」慶應義塾幼稚舎発行、昭和五九年、一七五頁。
- (18) 前掲「教員会議録」五月三一日。
- (19) 前掲「天現寺日記」六月七日。
- (20) 「御通知」ガリ版刷(慶應義塾福祉研究センター及び、慶應義塾幼稚舎蔵)。なお、この全文は『慶應義塾幼稚舎疎開学園の記録』下巻、慶應義塾幼稚舎「疎開学園の記録」編集委員会編、平成二八年、二二四～二二五頁に掲載されている。
- (21) 前掲「教員会議録」六月十三日。
- (22) 前掲「天現寺日記」六月十五日。
- (23) 藤川直迪『木造高校物語』北方新社、平成九年、九五頁。
- (24) 「今はむかしの物語Ⅱ——先生方の思い出話」『仔馬』第六巻、第五号、慶應義塾幼稚舎、昭和三〇年、九八頁。

- (25) 慶應義塾幼稚舎所蔵資料。縦書き用箋二枚に木造での活動の様子を報告する内容が示されている。宛名署名なし、筆跡不明であるが、日付、内容から先発隊の教員から修善寺の疎開学園、あるいは東京天現寺の幼稚舎に向けて発信されたものと推定した。
- (26) 慶應義塾幼稚舎所蔵資料。注(51)と同様の縦書き用箋一枚に記載されている。宛名署名なし、筆跡不明。注(51)と同じ筆跡の可能性が高いが、使用している筆記用具が異なるため、断定を避けた。日付、内容から注(51)と同じく先発隊が、疎開学園もしくは幼稚舎に送ったものと推定した。
- (27) 前掲「天現寺日記」六月二日。
- (28) 「二十一年K組の生徒が疎開中に書いた作文」前掲『慶應義塾幼稚舎疎開学園の記録』下巻、一九五〇―一九六頁。
- (29) 同前、一九六頁。
- (30) 同前一九七頁。
- (31) 同前。
- (32) 同前。
- (33) 前掲、中村、四一頁。
- (34) 前掲、中村、四一―四二頁。
- (35) 前掲、中村、四三頁。
- (36) 五期井上(旧姓岩本)文字書簡より。前掲『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』、二〇一五年、一一五―一一七頁。
- (37) 千葉寿雄『和徳小学校沿革史』和徳小学校創立百周年記念事業協賛会編、昭和五〇年、五二七頁。
- (38) 和徳国民学校の学校日誌より抜粋。前掲『和徳小学校沿革史』五二八頁。
- (39) 前掲、中村、四五頁。

- (40) 同前。
- (41) 『青山学院二二〇年』、『青山学院一二〇年』編集員会編、平成八年、四五頁。及び『弘前学院百年史』弘前学院、平成二年、一九頁。
- (42) 前掲、『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』一五八頁。
- (43) 木造での宿舎は次の通り（前掲『稿本 慶應義塾幼稚舎史』六七一～六七二頁）
- 第一学寮 木造中学校寄宿舎 七三名
  - 第六学年 慶組 應組
  - 第五学年 慶組（木造では、慶、應を合わせて一組とした）
  - 第二学寮 西教寺 三八名
  - 第三学年 應組
  - 第四学年 慶組
  - 第三学寮 慶應寺 三三名
  - 第三学年 慶組
  - 第一、二学年
- (44) 「木造中学校寄宿舎内慶應疎開学園 寮生生活誌 自昭和廿年七月二日」七月二日。慶應義塾幼稚舎所蔵（本稿では『寮生生活誌』とする）。
- (45) 前掲「今はむかしの物語Ⅱ——先生方の思い出話」九九頁。
- (46) 「東奥日報」昭和二〇年五月五日。池田健三の略歴などについては、同紙面及び原子昭三『津軽奇人伝』昭和五九年、一七八～一八七頁を参照した。
- (47) 「一燈園は、西田天香（一八七二～一九六八）が一九〇四年に開始し…（中略）…その信条は、「人は何者をも所有

しないでも、許されて生かされる」というもので…(中略)…一九三〇年代以降、隊列を組み市中の民間の便所掃除をして歩く独特の活動(一燈園では「行願」と呼ぶ)を頻繁に行い始めた」山本直美「もうひとつの生き方」一燈園における共同性と人間観」『日本文化人類学会大会発表要旨集』平成二十四年。

- (48) 「東奥日報」昭和二〇年五月六日。引用中、潰れて不明瞭な文字があつたため□で示した。
- (49) 前掲「今はむかしの物語Ⅱ——先生方の思い出話」九九頁。
- (50) 『月刊東奥』昭和二〇年、七月号。
- (51) 前掲「今はむかしの物語Ⅱ——先生方の思い出話」九九頁。
- (52) 前掲「寮生生活誌」七月五日、七月九日。
- (53) 前掲「教員会議録」七月七日。
- (54) 前掲「教員会議録」七月九日。
- (55) 『向陽——創立百周年記念誌』向陽小学校創立百年祭記念事業協賛会、昭和四七年、一一二頁。
- (56) 渡辺徳三郎「福沢諭吉 家庭教育のすすめ」慶應義塾大学出版会、平成二二年、三二六頁。
- (57) 吉田小五郎の提案により疎開学園から児童の東京の家庭に出されたもの。十日ごとに送られ、遠隔地の学園の様子を知らせる役割を担っていた。
- (58) 神谷一徳「四ヶ月の木造生活(上)」『慶應義塾幼稚舎同窓会報』第一五〇号、平成一二年。
- (59) 前掲「教員会議録」七月九日。
- (60) 佐々木敏子さん談「幼稚舎シンフォニー」『仔馬』第六巻、第五号、慶應義塾幼稚舎、昭和三〇年、一一二頁。
- (61) 慶応寺の次男による回想、同前『仔馬』一一〇頁。
- (62) 「二二年K組卒の生徒が疎開中に書いた作文」前掲『慶應義塾幼稚舎疎開学園の記録』下巻、一九八頁。
- (63) 「午後にたち三時半くらひについた」大島照雄「船沢日記」七月十六日(前掲、中村、四七頁)。

- (64) 前掲、中村、四七頁。
- (65) 『弘前市教育史 下巻』弘前市教育史編纂委員会、昭和五四年、四二一頁。
- (66) 前掲『弘前学院百年史』三九〇頁。(前掲、中村、四五頁。)
- 六月十二日の理事会は青山学院初等科学童六十名、附添教師八名を受入れ、高谷記念館を住宅にあてること、また、八甲第二七三八〇部隊の要請で六教室を約二ヶ月間貸すことを時局下緊急と認め決定している。しかし、青山学院の疎開児童は弘前市役所の指示により、船沢国民学校に通学することになったので、まもなく船沢へ移っていき、軍隊への教室貸与もあわただしい軍の動きの中で取りやめになった(傍線、引用者)。
- (67) 昭和三〇年三月一日、弘前市に編入。
- (68) 前掲「疎開の詳細 小宮山伍助氏より聞き書き」前掲、中村、四七頁。
- (69) 前掲『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』五七頁。
- (70) 同前、八一〜八二頁。
- (71) 同前、一三〇頁。
- (72) 同前、一一四〜一五七頁。
- (73) 「座談会 青山学院の学童疎開」『青山学院と平和へのメッセージ』平成十年、二九〇頁。
- (74) 『信仰の盾にまもられて——青山学院初等部五十年のあゆみ』青山学院初等部、昭和六二年、三九頁。
- (75) 前掲、中村、五〇頁。
- (76) 当時の弘前女学校の校長成田孝治は、東北大学臨時教員養成所を卒業後、青山学院高等女学部に奉職、その後、東奥義塾、弘前女学院を経て、戦後は青山学院中等部や高等部に努めている(『青山学院九十年史』青山学院、昭和四〇年)。
- (77) 前掲「天現寺日記」七月九日。

(78) 前掲『青山学院緑岡初等学校の学童集団疎開』五二頁。

(79) 前掲「座談会」青山学院の学童疎開」二九二頁。